

DXへの対応

—内部の整備—

DX(デジタルフォメーション)とは、

「企業がビジネス環境の激しい変化に対応するために、

デジタル技術を活用し、

業務、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、

新たなデジタル時代にも十分に勝ち残れるよう自社の競争力を高めること」

データ活用の重要性が大きな関心事になっています。

データがあれば、

ユーザー分析が出来る

自社分析が出来る

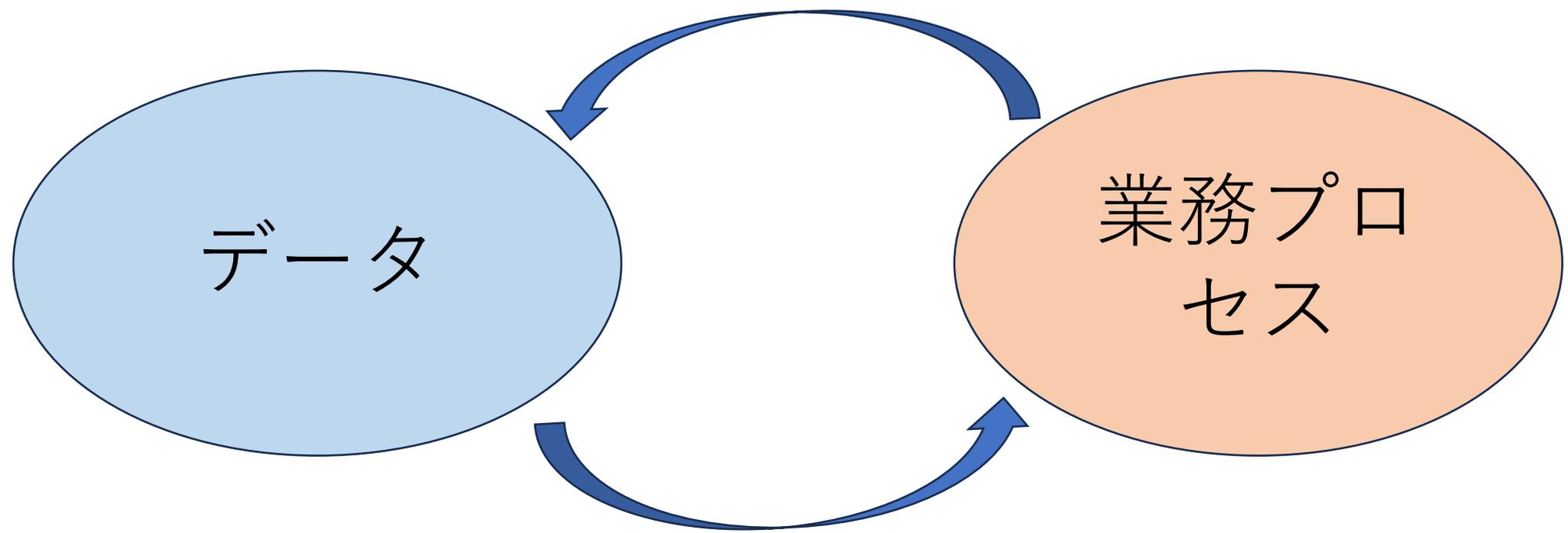
AI活用を図っていく上では必須になる

更に、社会データの様にもっと統合されたデータにしていく必要もある

ところでデータとは？

業務の実施の結果であり、記録と言える

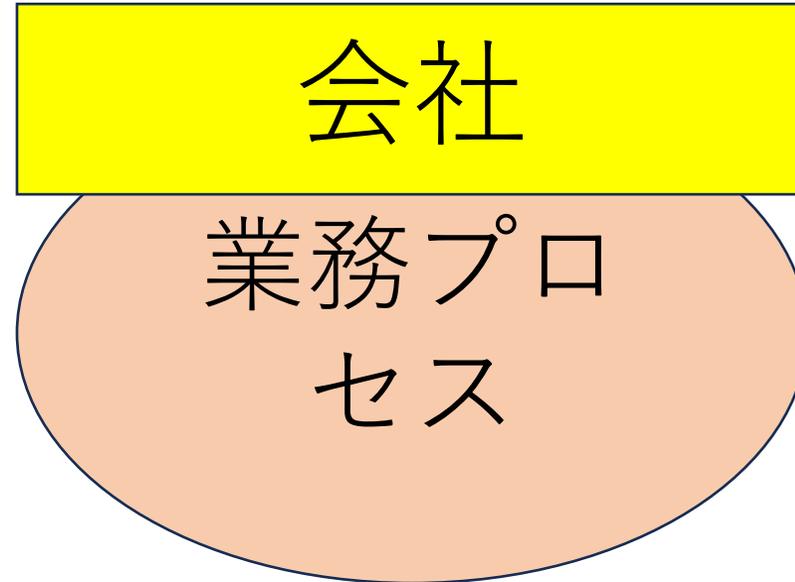
業務の記録



欲しいデータから業務への制約が生じることも

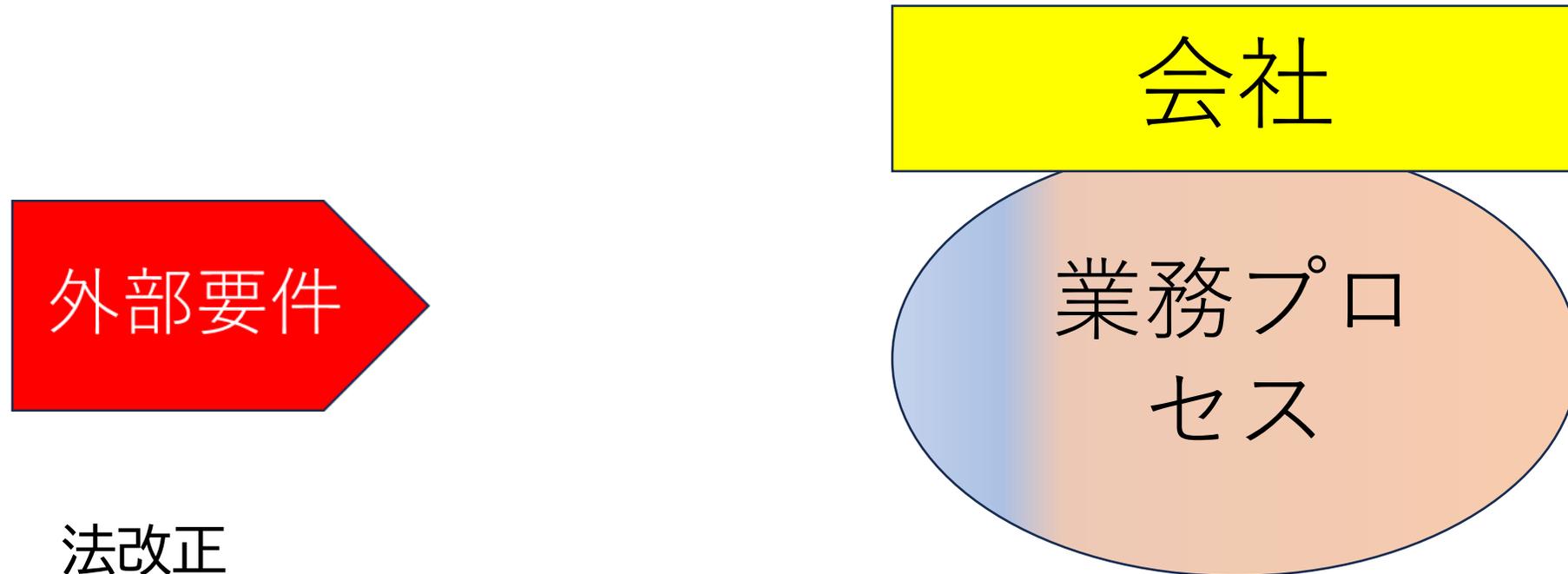
抽象的にこの業務プロセスについて捉えてみると、

業務プロセスの上に会社運営が行われていると言えます



様々な外部要件対応が生じると、

業務プロセスを変更して対応する必要があります



法改正

標準改正 (ex. IFRS対応)

受注方法の変更

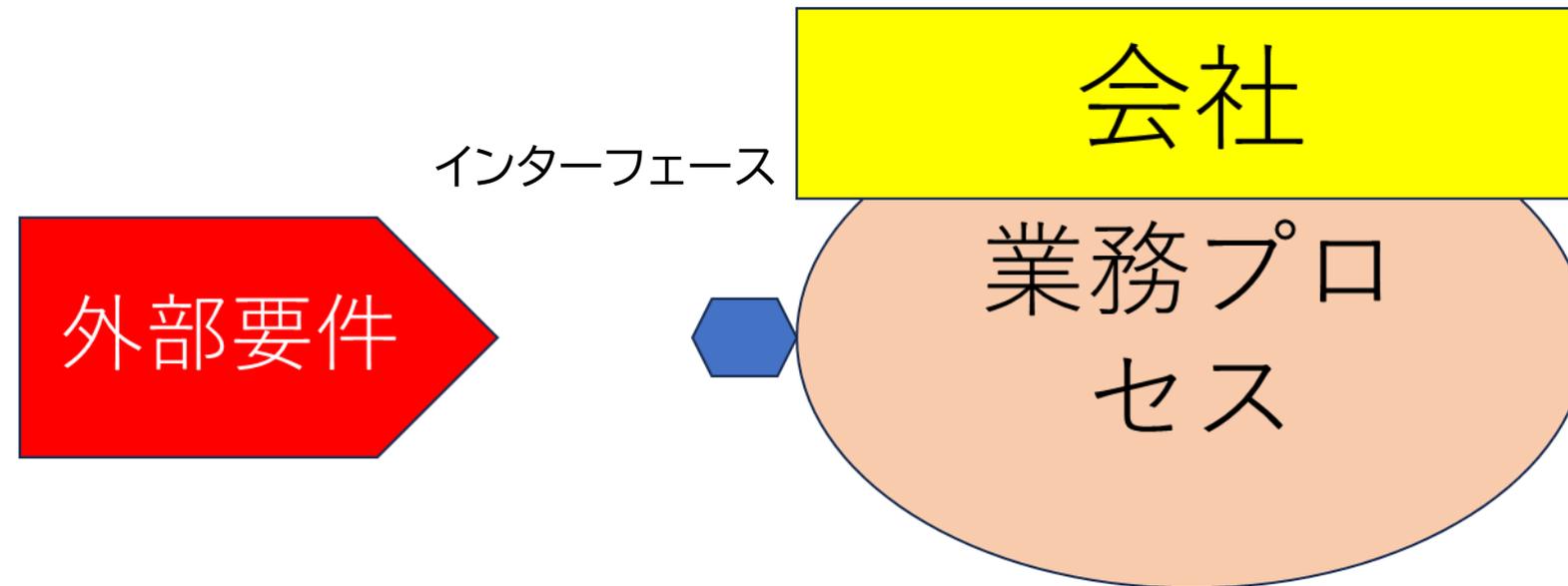
支払・入金方法の変更

例えば、売り上げ計上基準の変更などが例として挙げられます

売り上げ基準 → 着荷基準・納入基準

様々な外部要件対応が生じると、

業務プロセスを変更して対応する必要が生じます

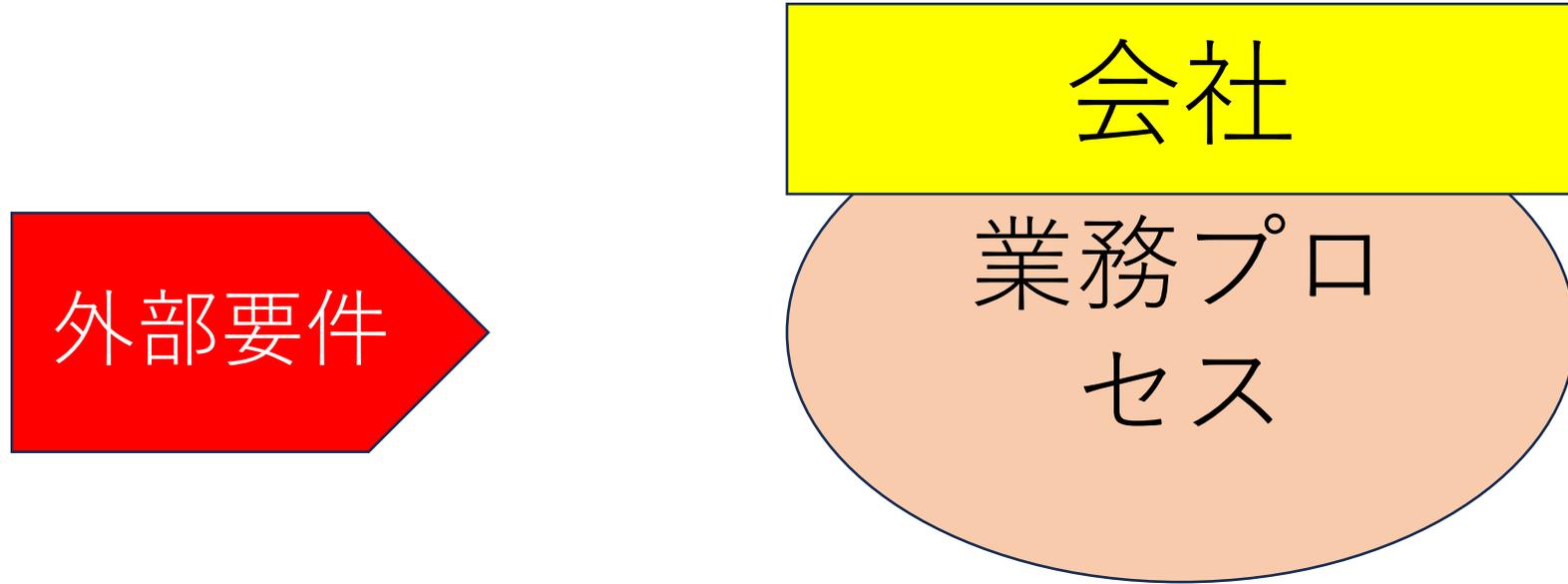


また、外部連携対応を中心に、業務プロセスを変えるのではなく、

インターフェースを付け足すことで対応する事も多くあります

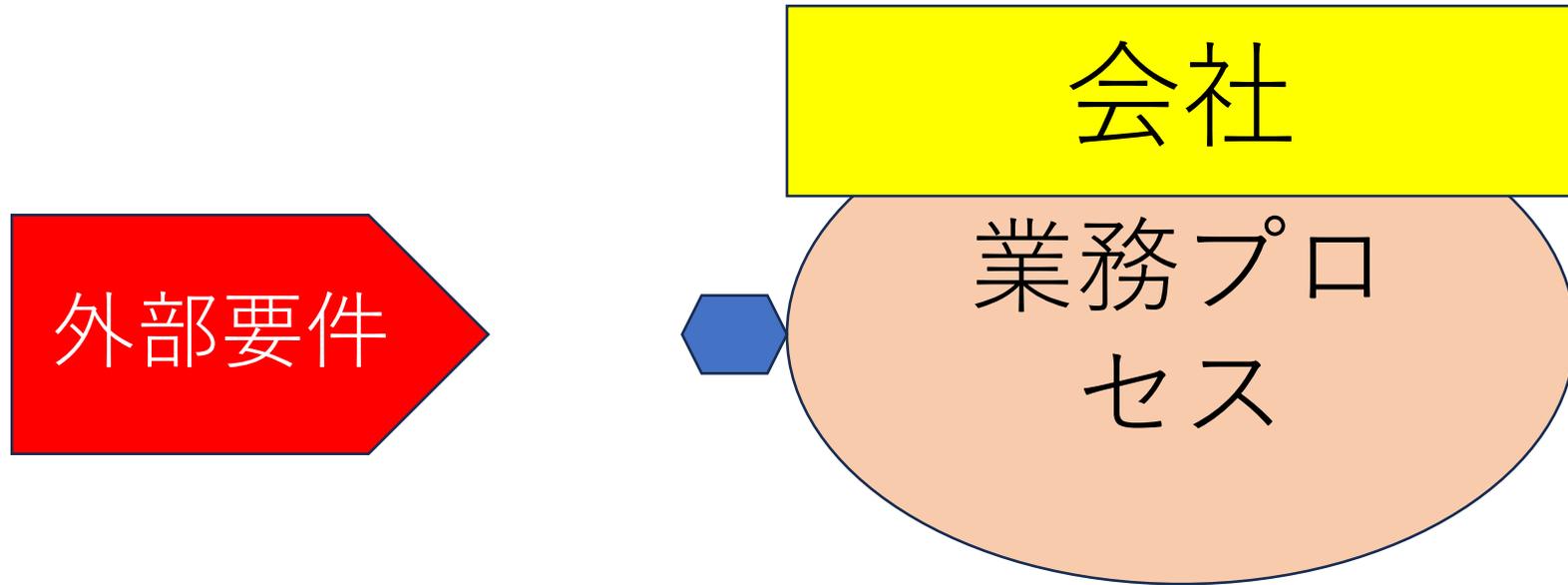
ex. インボイス対応、電子帳簿保存法対応

この様な対応が多くなると、インターフェースが増え、それらの整合性について気にかける必要が生じてきます。



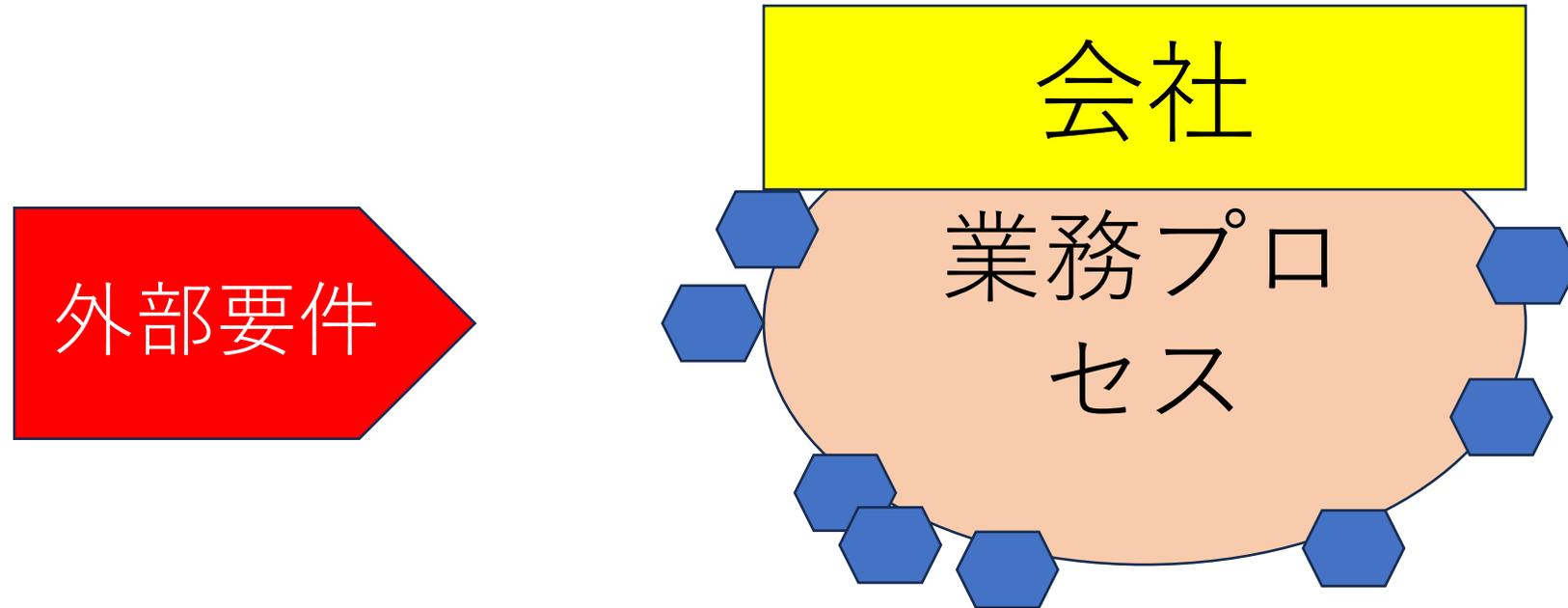
これに対してこれまでは、『既存業務に影響を与えない』ことを重点に対応してきたように感じます。

この様な対応が多くなると、インターフェースが増え、それらの整合性について気にかける必要が生じてきます。



そこで、外部とのインターフェースを付け足して対応を取る手が良く使われてきました。

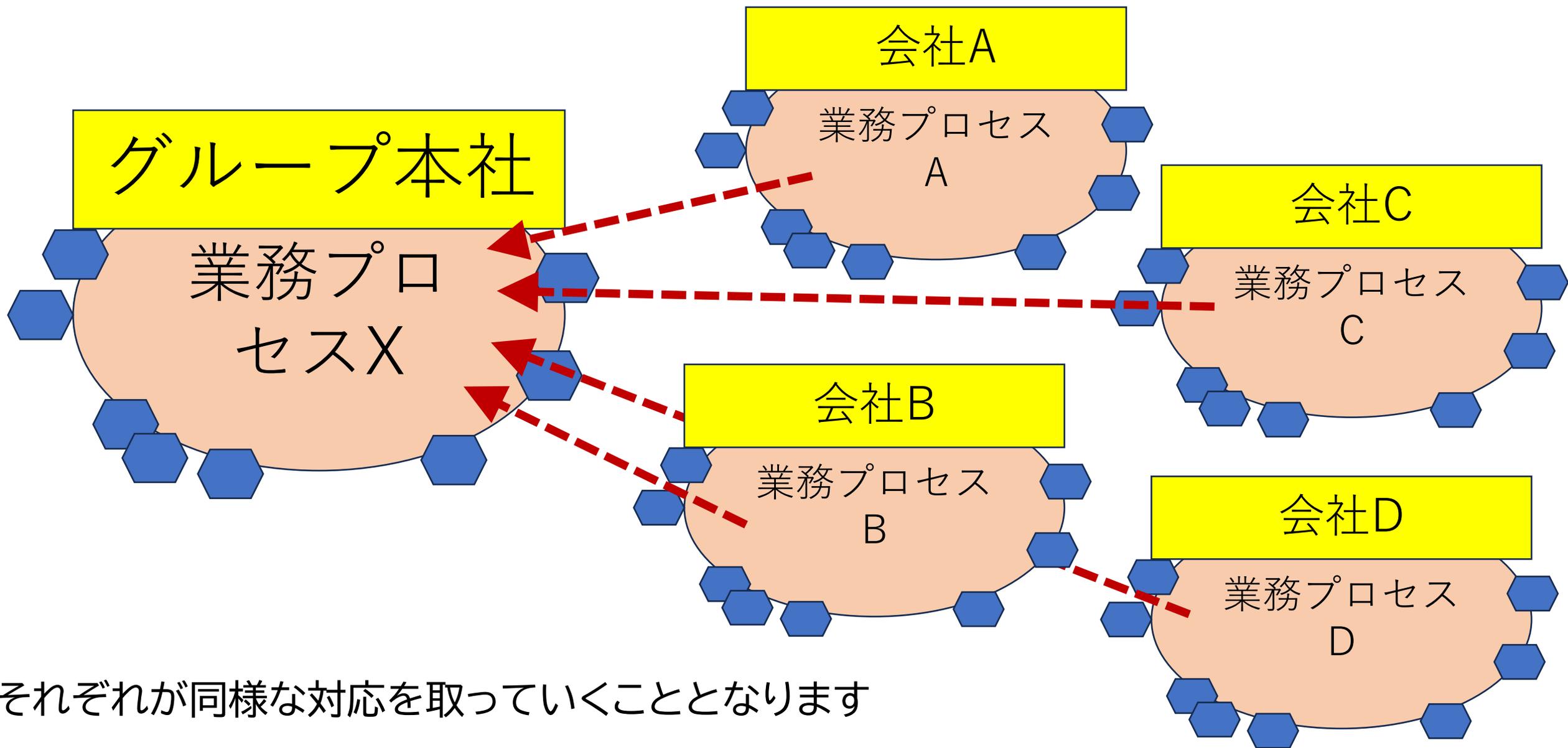
この様な対応が多くなると、インターフェースが増え、それらの整合性について気にかける必要が生じてきます。



そしてそれがどんどん増えてきています。

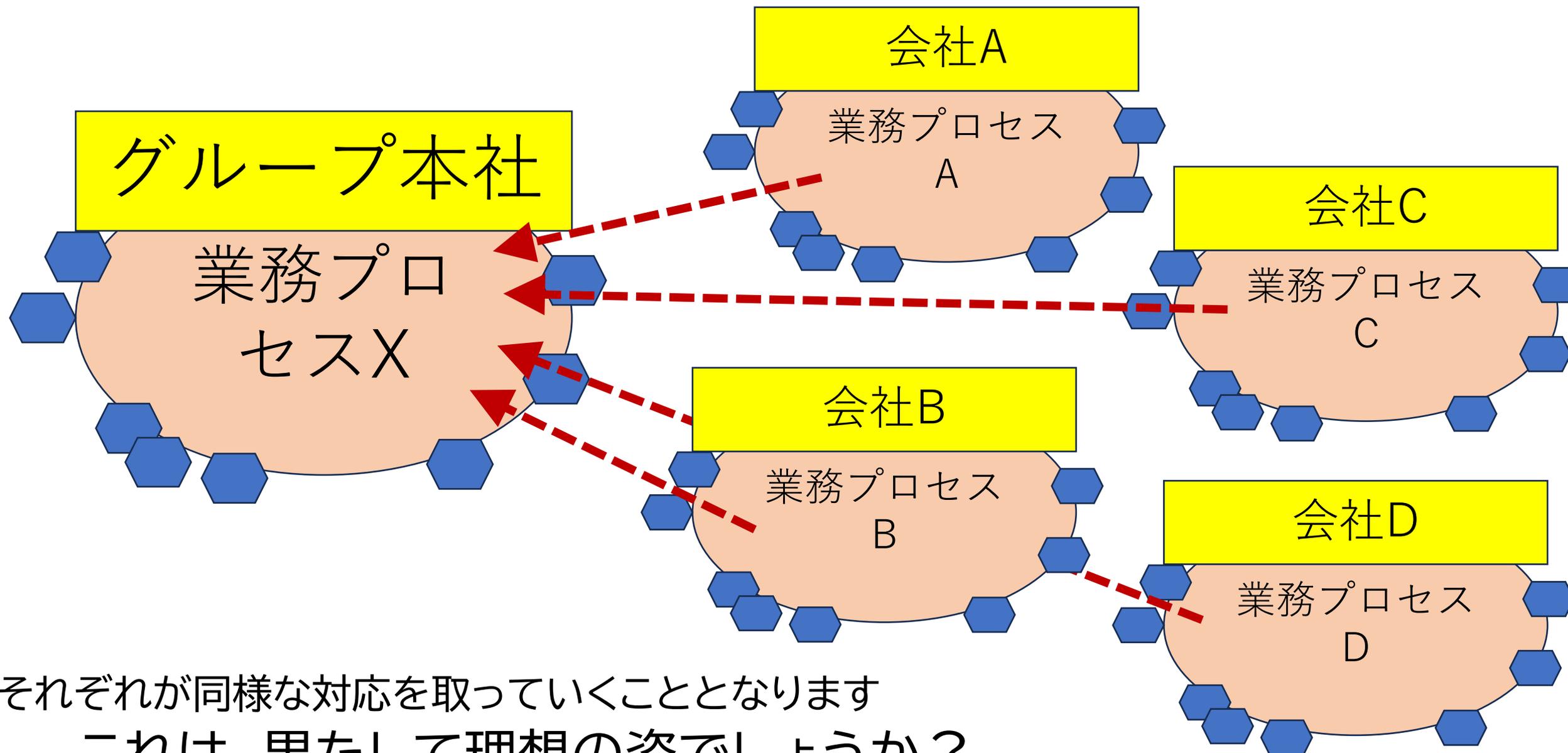
1社だけでしたらこれで良いのかも知れませんが、...

グループ経営の様に複数社が関わっているとすると、



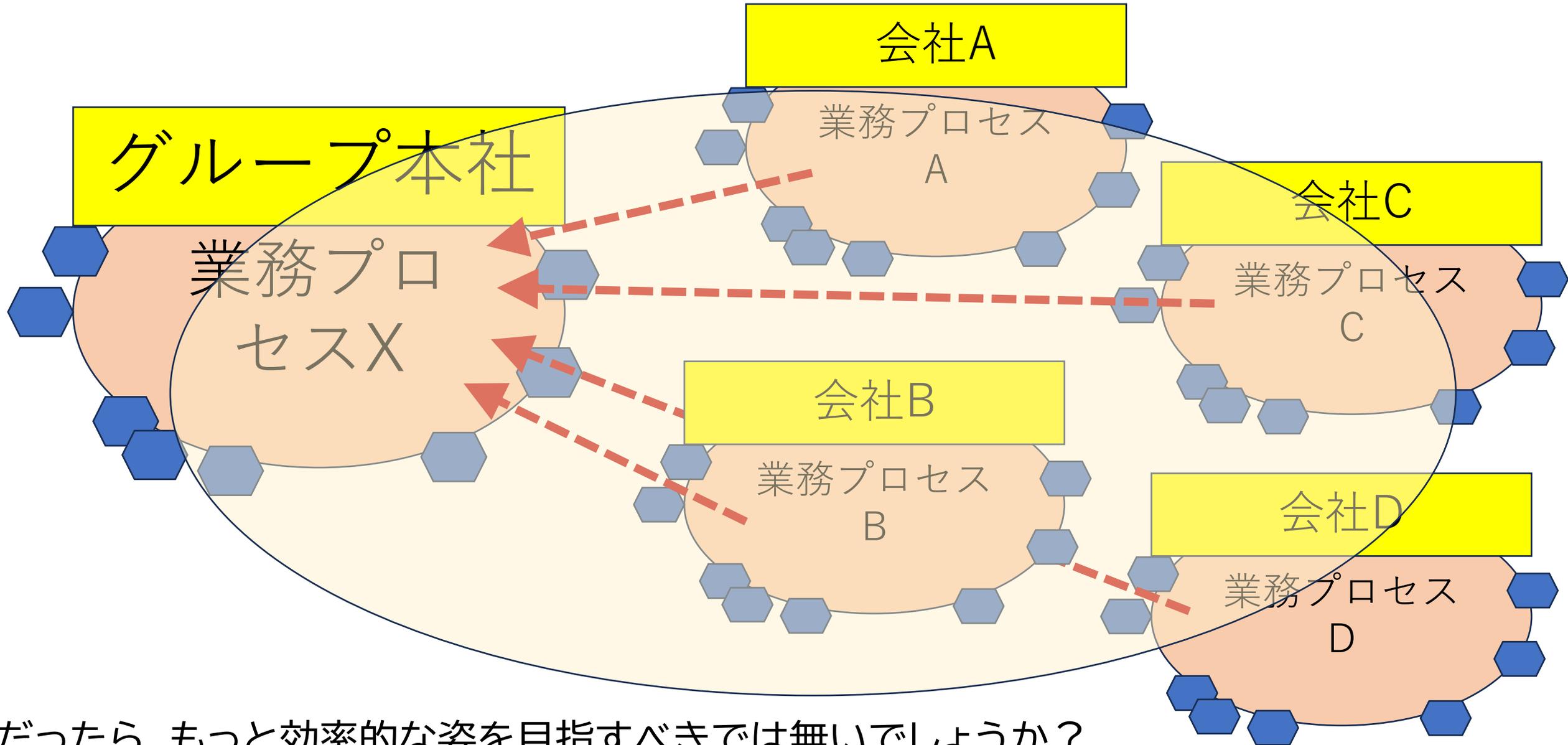
それぞれが同様な対応を取っていくこととなります

グループ経営の様に複数社が関わっているとすると、



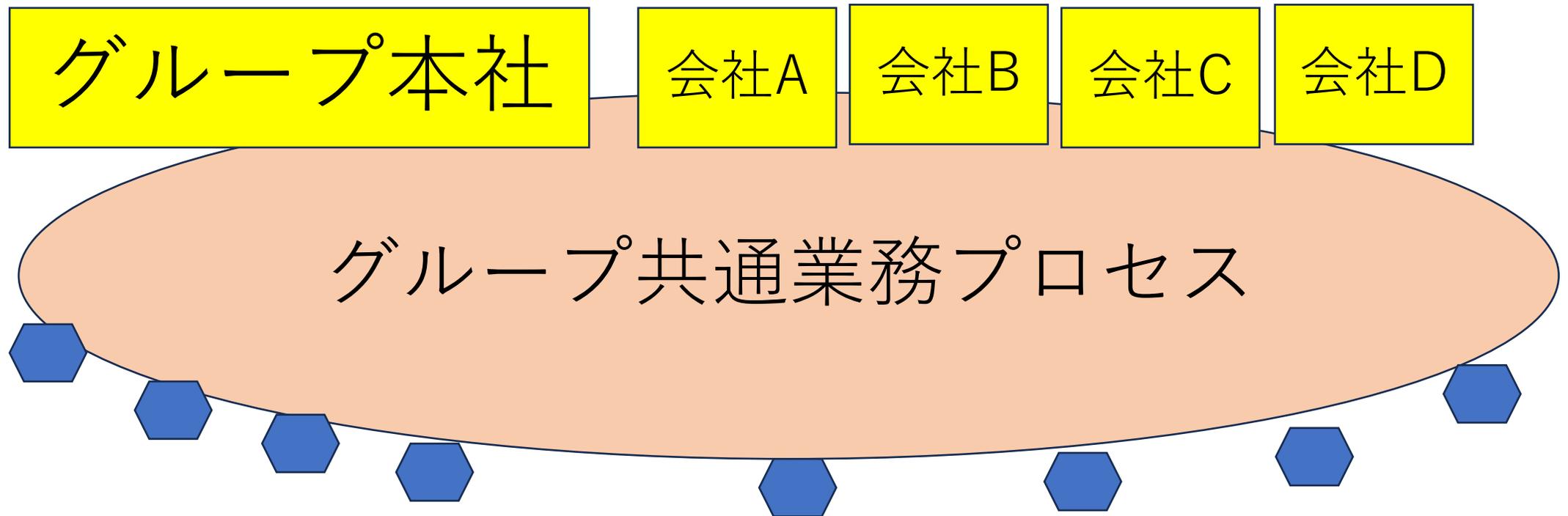
それぞれが同様な対応を取っていくこととなります
これは、果たして理想の姿でしょうか？

業務プロセスの特に内部処理(会計・財務など)は、社内処理であり、基本、お客様には関係ありません。

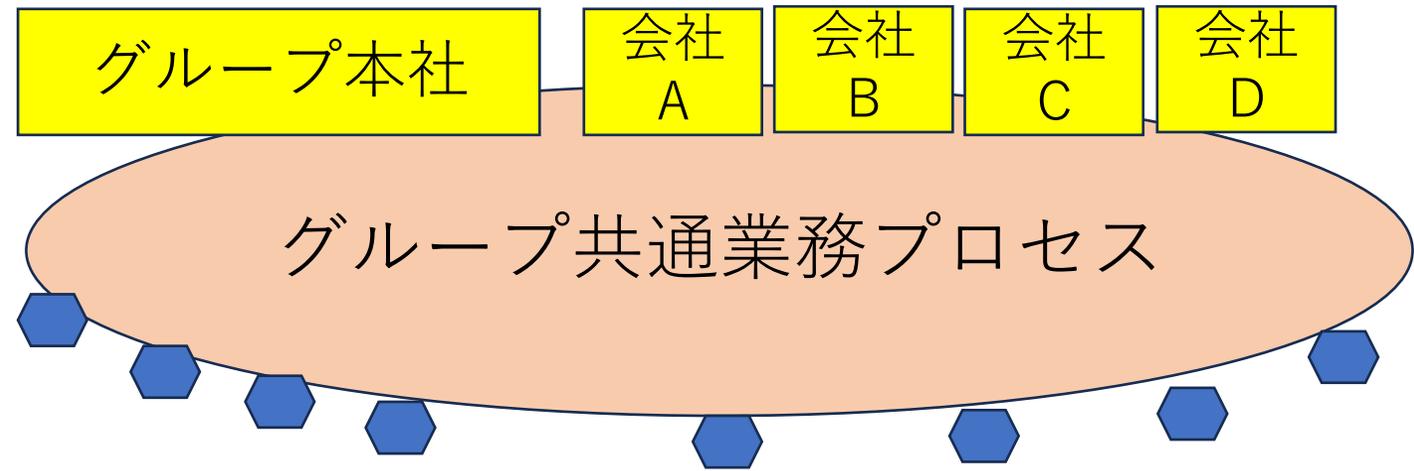


だったら、もっと効率的な姿を目指すべきでは無いでしょうか？

それが、『業務の標準化』の考え方です。

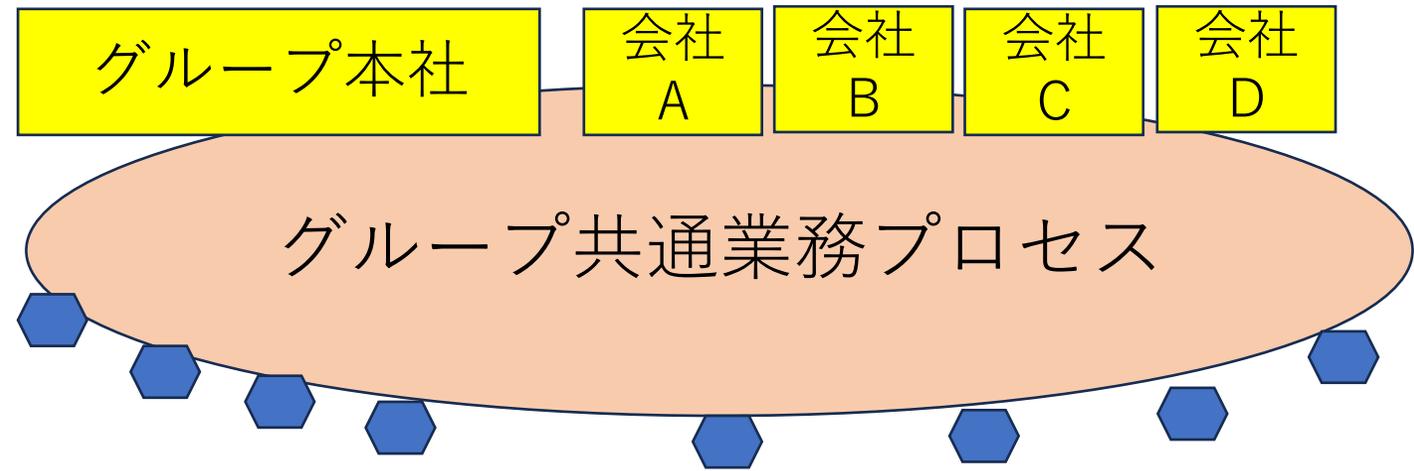


『業務の標準化』ができると、



- ・業務の真の一括管理により間接費が劇的に下がります
- ・各社データも一括管理されれば、レポートの必要は無く、リアルタイムで把握できます
- ・外部要件対応も各社で対応するのではなく、1点で対応すれば良くなります

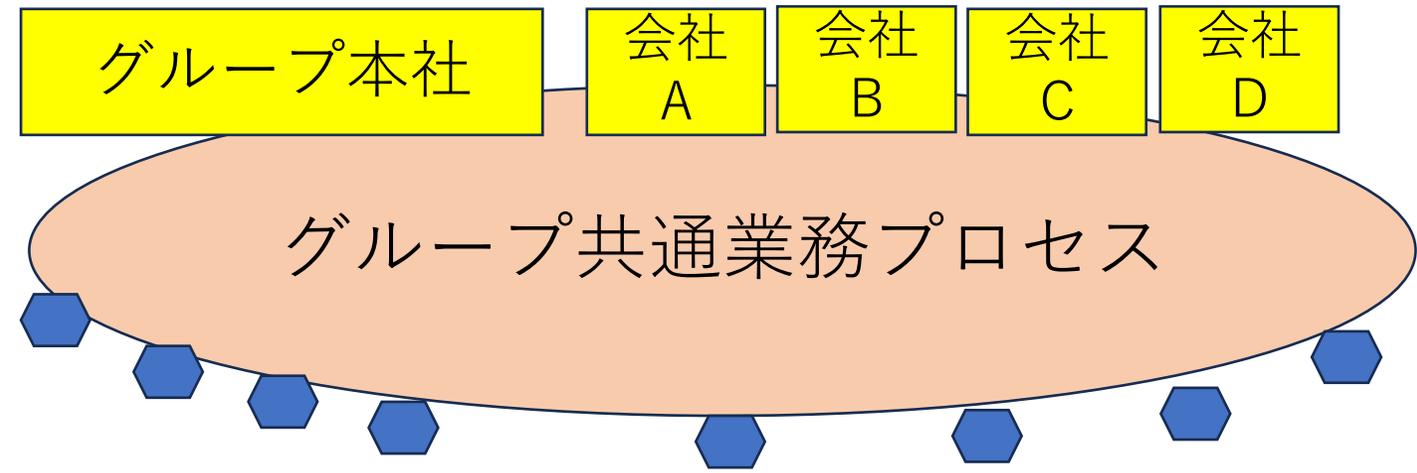
勿論、困難も予想されます



- ・共通化・標準化は果たして可能なのか？
- ・グループ全体で発生する個別要件対応が出来なくなるのではないのか？
- ・この様なシステムを維持するのは大変なのではないのか？
- ・各社の個性が失われるのではないのか？

などなど...

しかし先進グローバル企業は既にこの様に運営されています



- そして効率化を実現しています
- リアルタイム経営を実施しています
- グローバル市場で活躍し、ますますスピードを上げて次の機会を探っています

私達は、これに追いつき、追い越していかなくてはなりません！

でも、どうしたら良いのか!?

◇ しっかりやる

自社グループのビジネスプロセスを明らかにし、それを元に“標準化された姿”を作る
そしてそれに向けてグループ全体を収斂させる

←グローバル企業はこのやり方を取っていました

ただ、これらは以下の標準プロセスに元々準拠している、とも言えます

◇ 素早くやる

欧米ではこの様な業務プロセスの“標準”があります

これを学び、それに向けて収斂させる、というやり方もあります。

←SAPを始めとするERPは、この標準プロセスを実施できる統合ソフトです

途上国は、このやり方で実現しています

◇ 変えない

「自社に合わない」としてこれまで多くの企業はこの様な取り組みを行いませんでした
果たしてその結果は？

提言:

業務プロセスに着目して、先ずは自社、及びグループの『標準化』を進めることで「業務、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、新たなデジタル時代にも十分に勝ち残れるよう自社の競争力を高めるましょう！」

この上で、IT化、或いはアウトソース化を図ることで大きな削減効果が見込まれ、同時に内部の“透明化”が実現できます。

これは同時に、対外部との接続性を容易にすることにも繋がり、

- ・外部からの変更要件にも、迅速に対応していただけます
更に最新のツールを活用して一層の効率化を図っていただけます(ex.プロセスマイニングなど)

… 守りのDX

- ・攻めたい市場に向け、“繋がっていく”こともミニマムコストで出来るようになります

… 攻めのDX

ABC協会もこの様なDX対応の基となる、業務プロセスの解析・勉強の研究会を実施して参ります。

是非、ご参加ください。

ネスレ社の業務変革を牽引したキーマンに学ぶ、グローバルビジネスで求められるITランドスケープとCIOの役割 オリビエ・グアン氏講演

- ・今から約15年前に「GLOBE」と命名された大規模プロジェクトを立ち上げました。
このプロジェクトは、国ごとに異なっていたシステムをSAP ERPを使って1つのシステムに統合するもの
「重要なことは、新たなITを導入する前に業務プロセスの標準化に着手することです。
ITを刷新した後で業務を変える考え方では、必ず失敗します」
- ・2000年初頭のプロジェクト開始から10年以上を経た導入状況としては、現在(当時)89のネスレの市場で各業務部門がGLOBEのプロセス、データ、システムを使用して業務を行っています。
マーケットのカバー率は95%で、ユーザーは約16万、378のネスレの工場と428の提携先の工場、1,109の流通センター、591の営業拠点で利用されている
「グローバル統合で業務改革が進み、業務のシンプル化にとどまらず、組織のシンプル化も実現しています」とその成果を評価しました。